

大学生の避妊および低用量ピルに関する意識

羽入 雪子¹⁾ 佐藤 怜²⁾

A Study on the Knowledge and Attitudes of Undergraduates toward the Contraception and the Low-dose Oral Contraceptive Pill

Setsuko HANYU Satoru SATO

要旨：大学生の避妊および低用量ピルに関する意識を調査し、今後の性の教育・支援のあり方について考察した。秋田市内の大学生女子314人、男子401人を対象に、2001年10月～11月に調査を行い、以下の結果を得た。1) 大学生の避妊の実行率は、全国レベルより低く、避妊方法はコンドームや膣外射精が多かった。2) 避妊方法を選ぶ基準は、男女とも「避妊効果」が多く、次いで「男性主体」が多かった。3) 避妊方法を知りたい学生は、性交経験のある学生に多かった。4) 低用量ピルの認知度は学生の約40%であり、ピルの使用に賛成の学生は約25%で、性交経験のある学生に多かった。5) 低用量ピル使用賛成の理由は「避妊効果が高い」であり、使用反対の理由は「副作用」であった。6) 低用量ピルに関する情報を知りたい学生は多く、手段としてインターネットや雑誌を希望していた。

以上のことから、性を肯定的に捉えた立場で「性交」を語り、望まない妊娠や性感染症を予防する方法を明確に伝え、対人関係的視点を盛り込んだ情報提供が必要であることが示唆された。

キーワード：避妊、低用量ピル、性教育

Summary : This study was conducted to investigate knowledge of college undergraduates about the contraception and the oral contraceptive pill. The questionnaires were administered to the 314 female and 401 male college students of Akita city from October to November, 2001. The results were as follows : The number of Akita students who use the contraceptive method was lower compare to the national level. It was revealed that condoms are often used and some depend on ejaculation outside a vagina, a method which initiative is taken by males. The students who have experienced sexual intercourse hope to learn more about the contraception. About 40% of the students had knowledge of the Pill, and the 25% students of them were in favor of the contraceptive pill, giving its effectiveness as a reason while some students disagreed by pointing out its side effect. It was clarified that many students wish to learn about the low-dose oral contraceptive pill and they use the Internet or magazines as an information resource. All these results reflect that it is important to provide students with valid information in order to avoid unwanted pregnancy and the STD at the same time focusing on the 'personal-relations-viewpoint'.

Keywords : Contraception, Low-dose oral contraceptive pill, Sexual education

1) 看護学科講師 2) 秋田大学名誉教授

本研究は、平成13年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

はじめに

我が国において最も利用頻度が高い避妊法は、男性が主体的に行うコンドーム法であり、低用量ピルや銅付加IUD（子宮内避妊器具）、女性用コンドームなどが認可された今もこの現状はあまり変わっていない。

このような状況の中で若年層の性交経験率は上昇傾向にあり、それに伴う10代の人工妊娠中絶率の増加は、性感染症（以下STDとする）の増加とともに、性行為によってもたらされるリスクとして指摘される。望まない妊娠は、人工妊娠中絶を選択する、しないにかかわらず、人生設計を狂わせ心身への影響が大きいことが推測される。

低用量ピルは、我が国において米国に遅れること40年、1999年ようやく認可発売された。認可が遅れた背景として、芦野氏は、①女性の性道徳の乱れ、②性感染症/AIDS拡大のおそれ、③内分泌攪乱化学物質の影響、④少子化への懸念を指摘している。しかし、低用量ピルは、女性が主体的にできる避妊法、避妊率の高さと月経障害の改善などの副効用を特徴として、その普及に関心が寄せられているところである。

そこで今回は、大学生を対象として避妊および低用量ピルに関する意識の実態について把握し、今後の若者への性の教育・支援のあり方について検討することにした。

I. 研究目的

大学生の避妊および低用量ピルに関する意識を知り、若者への性の教育・支援について考察する。

II. 研究方法

調査対象者は秋田市内の大学及び短期大学の学生715名（女子314名、男子401名）で、平均年齢は19.9歳であった。調査期間は、平成13年10月～11月で、データの収集方法は、無記名の選択方式・一部自記式質問調査票を配布し、記入後回収した。

有効回答率は92.7%である。属性間の比較検討するにあたっては χ^2 検定を用いた。

調査内容は、避妊に関すること（①性交経験の有無、②避妊の実行と方法、③避妊方法の選択基準、④避妊しない理由）、低用量ピルに関すること（①周知度、②使用の賛否とその理由、③得たい情報とその手段）である。

III. 結果

1. 避妊について

性交経験率は、全体で55.8%（399名）で、女子は64.0%（201名）、男子は49.4%（198名）であり、女子の方が性交経験率が高い（ $p < 0.01$ ）。

性交経験のある学生（以下、性交有とする）の避妊実行の有無については、「必ずする」は女子が36.8%（74名）、男子が48.5%（96名）、「時々する」は女子が50.2%（101名）、男子が36.9%（73名）、「殆どしない」は女子が12.9%（26名）、男子で14.6%（29名）であった。避妊しない理由は、女子は「避妊用具がない」20.4%（41名）、「面倒」16.4%（33名）、「妊娠しないと思った」13.9%（28名）、「性感が下がるから」11.4%（23名）の順に多く、男子は「面倒」24.7%（49名）、「避妊用具がない」18.2%（36名）、「性感が下がるから」14.1%、「妊娠しないと思った」7.6%（15名）の順に多かった（図1）。「妊娠しないと思った」「雰囲気壊れるから」「言い出せなかった」は、女子の方が男子より多い（ $p < 0.01$ ）。実行している避妊方法は、「コンドーム」が男女とも最も多く、女子で85.1%（171名）、男子で83.8%（166名）、次いで「膣外射精」があげられ女子で27.4%（55名）、男子で24.2%（48名）であった。

学生全体の避妊方法を選ぶ基準は、女子は「避妊効果」51.6%、「手軽さ」25.2%、「男性主体」22.6%の順に多く、男子は「避妊効果」34.2%、「わからない」26.7%、「男性主体」22.9%の順で多かった（図2）。「女性主体」は女子9.9%、男子6.7%と少ない。性交経験別に見ると女子の性交有の上位3位は女性全体と同じで、性交経験のない（以下、性交無とする）学生では、「わからない」が26.5%で2番目に多い。男子の性交有では「男性主体」が22.9%で2位を占め、性交無では「わからない」が38.4%で最も多かった。避妊行動で自分に不足しているものは、男女とも「わからない」「避妊法の種類」「妊娠のメカニズム」の順に多かった。性交経験別で見ると女子では性交有の上位3位は女子全体と同じ順位であり、男子の性交有で「妊娠のメカニズム」「わからない」「避妊法の種類」の順に多かった。避妊方法をもっと知りたいと「思う」は、女子で61.8%（194名）、男子で41.6%（167名）、「思わない」は、女子で11.5%（36名）、男子で19.2%（77名）、「わからない」は女子で25.5%（80名）、男子で35.4%（142名）であった。男女とも性交有の方が性交無

より「思う」が多い ($p < 0.01$)。

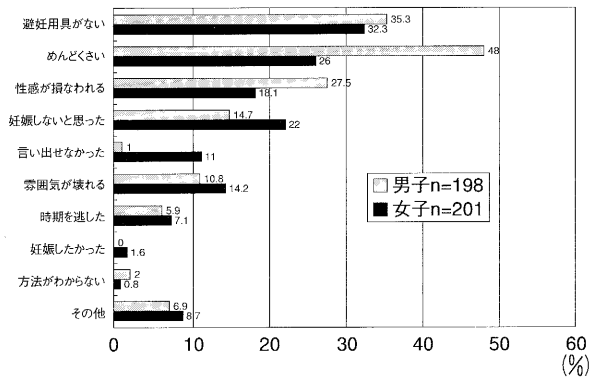


図1 避妊しない理由 性別： $\chi^2 = 25.7(10)**$

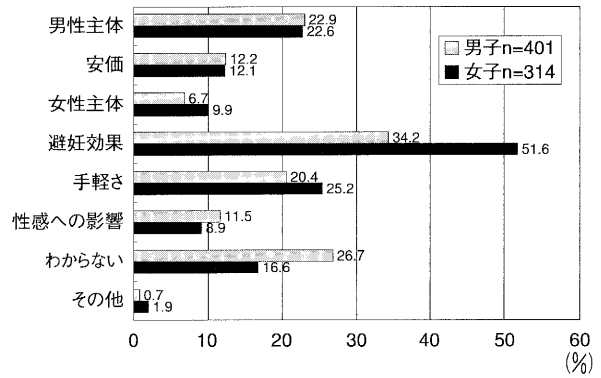


図2 避妊方法を選ぶ基準 性別： $\chi^2 = 25.4(7)**$

2. 低用量ピルについて

「ピルをよく知っている」は、女子で1.6% (5名)、男子で4.5% (18名)、「ある程度知っている」は、女子で39.8% (125名)、男子で32.9% (132名)、「あまり知らない」は、女子で45.5% (143名) 男

子で40.4% (162名)、「知らない」は、女子で13.1% (41名)、男子で22.2% (89名)であった (表1)。性交経験別に見ると「よく知っている」「ある程度知っている」では、性交有の人が男女とも多い ($p < 0.01$)。

表1 ピルの周知度

		よく知っている	ある程度知っている	あまり知らない	知らない	計	χ^2 -test
女	性交有	2.5(5)	46.3(93)	39.8(80)	11.4(23)	100.0(201)	13.80(3)**
	性交無	0	28.3(32)	55.8(63)	15.9(18)	100.0(113)	
男	性交有	5.6(11)	38.4(76)	38.4(76)	17.7(35)	100.0(198)	8.50(3)*
	性交無	3.4(7)	27.6(56)	42.4(86)	26.6(54)	100.0(203)	
性別	女子	1.6(5)	39.8(125)	45.5(143)	13.1(41)	100.0(314)	16.83(3)**
	男子	4.5(18)	32.9(132)	40.4(162)	22.2(89)	100.0(401)	
性交経験別	有	4.3(17)	42.4(169)	39.1(156)	14.5(58)	100.0 399	21.37(3)**
	無	2.2(7)	27.8(88)	47.2(149)	22.8(72)	100.0 316	
全体		3.2(23)	22.0(157)	28.7(205)	18.2(130)	100.0 715	

ピルの使用に「賛成」は、女子で25.2% (79名)、男子で23.9% (96名)、「反対」は女子で8.9% (28名)、男子で14% (56名)、「わからない」は、女子で65.6% (206名)、男子で61.8% (248名)であった (表2)。性交経験別に見ると「賛成」「反対」が男女とも性交有の人が性交無の人より多い。ピルの使用賛成の理由は、「避妊効果が高い」が女子で72.2% (57名)、男子で64.6% (62名)、「女性が主体にできる」が女子で58.2% (46名)、男子で42.7% (41名)、「使用方法が簡単だから」が女子で24.1% (19名) 男子で19.8% (19名)であった (図3)。性交経験別に見ると女子の性交有では上位3つが女子全体と同じであり、性交無では、

「女性が主体的にできる」が最も多かった。男子の性交有では「女性が主体的にできる」「性感を損なわない」が2位、3位を占め、性交無では「女性が主体的にできる」が2位であった。ピルの使用反対の理由は、「副作用が気になる」が女子57.1% (16名)、男子73.2% (41名)と最も多く、次いで「女性に負担がかかる」が女子53.6% (15名)、男子66.1% (37名)であった (図4)。性交経験別に見てもこの二つの順位は同じであった。「性のモラルが乱れる」と答えた人は男女とも25%あり、男子においては性交無の学生に多かった。

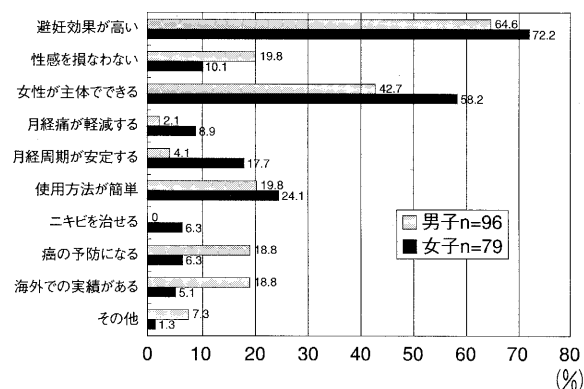


図3 ピル使用の賛成理由 性別： $\chi^2=34.3(9)**$

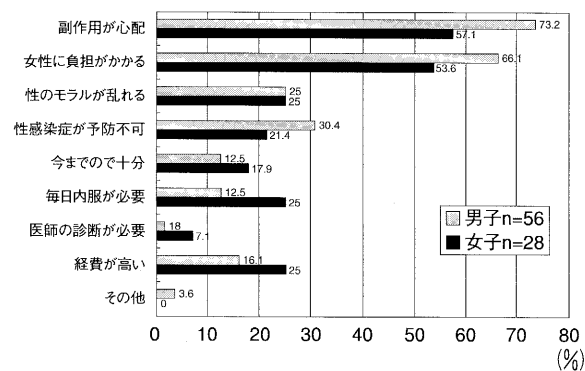


図4 ピル使用の反対理由 性別： $\chi^2=7.2(8)ns$

表2 ピルの使用に賛成か、反対か

		賛成	反対	わからない	NA	計	χ^2 -test
女	性交有	28.4(57)	10.0(20)	61.7(124)	0	100.0(201)	4.25(2)ns
	性交無	19.4(22)	7.1(8)	72.6(82)	0.9(1)	100.0(113)	
男	性交有	30.8(61)	15.2(30)	54.0(107)	0	100.0(198)	11.95(2)**
	性交無	17.2(35)	12.8(26)	69.5(141)	0.5(1)	100.0(203)	
性別	女子	25.2(79)	8.9(28)	65.6(206)	0.3(1)	100.0(314)	4.32(2)ns
	男子	23.9(96)	14.0(56)	61.8(248)	0.2(1)	100.0(401)	
性交経験別	有	29.6(118)	12.5(50)	57.9(231)	0	100.0(399)	14.53(2)**
	無	18.0(57)	10.8(34)	70.6(223)	0.6(2)	100.0(316)	
全体		24.5(175)	11.7(84)	63.5(454)	0.3(2)	100.0(715)	

ピルに関する情報を「得たい」と答えた者は、女子が54.5%（171名）と最も多く、男子では「わからない」が45.9%（184名）で最も多く、「得たい」は36.4%（146名）であった。性交経験別に見ると「得たい」は性交有に多く、「わからない」「得たくない」と答えた者は、男女とも性交無に多かった（ $p<0.05$ ）。ピルに関して得たい情報は、「副作用」が最も多く、女子77.8%（133名）、男子71.2%（104名）、次いで「避妊効果」が女子67.3%（115名）男子58.9%（86名）、「副効用」が女子44.4%（76名）、男子56.2%（82名）であった（図5）。情報収集する手段として望むものは、男女とも「雑誌」が最も多く、女子61.4%（105名）男子50.7%（74名）、次に多いのが「インターネット」で女子34.5%（59名）、男子54.1%（79名）、そして「学校での性教育」の順で女子25.1%（43名）、男子39.7%（58名）であった。「専門家に相談する」は男女とも少なく、その他としては、テレビ、病院、小冊子の配布、口コミなどがあげられる（図6）。

IV. 考察

1. 避妊について

大学生の性交経験率は、第5回青少年の性行動（以下、全国調査とする）によると女子は50.3%、男子は62.5%であるが、本調査対象者は女子が64.0%、男子が49.4%となっており、女子の方が性交経験率が上回っていることがわかる。しかし、避妊の実行率においては全国調査では、「必ずする」が女子65.9%、男子が66.0%であり、本調査対象者は女子36.8%、男子48.5%であり低いことがわかった。取り入れている避妊の方法は、コンドーム、膣外射精、荻野式の順に多く、これは全国調査とほぼ同じである。避妊をしない理由としては、女子では「避妊用具がない」が最も多く、次いで「めんどくさい」が多く、避妊に対して自己責任ある態度でないことが伺われる。予測しない性交であったにせよ、妊娠を引き受けるのは女性であることや、妊娠やSTDを予防するための具体的な行動をもっと意識づける必要があると考える。男子は「めんどくさい」が最も多く、「避妊用具がない」が2番目に多い。「避妊用

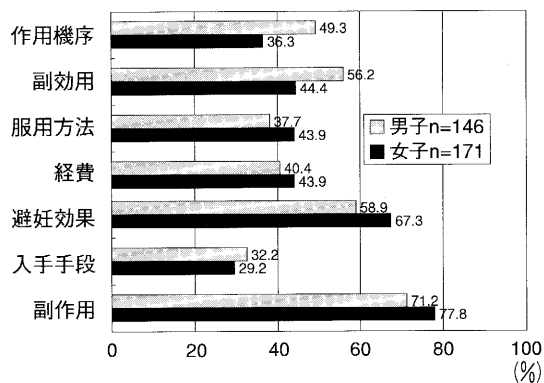


図5 ピルに関して得たい情報 性別： $\chi^2=10.1(7)ns$

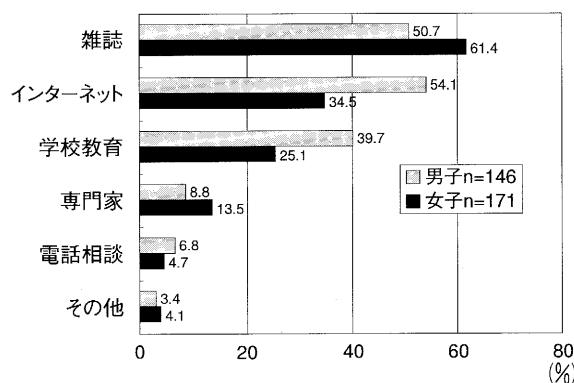


図6 希望する情報の入手手段 性別： $\chi^2=13.8(5)^*$

具がない」「めんどくさい」を合わせると、約4割の学生が避妊をしない理由としてあげている。若者の性²⁾によると、「若者の避妊をしない理由として示唆されるものは、ビデオのような媒体に最も影響を受ける青少年の自分本位の考え方や、興味・関心に引きずられる自我の弱さ、男子では相手を思いやる気持ちや共感性のなさ、女子では自分自身を大切に思う気持ちや自己受容性の低下などが想起できる」と述べている。本調査の性交経験率、避妊の実行率、避妊しない理由等からも、性行動によってもたらされる可能性があるリスクへの責任感の低さ、相手や自分を大切にする気持ちの低さが伺われる。

避妊方法を選ぶ基準では、女子の22.6%が「男性主体」と答えている。妊娠を引き受けるのは女性であるのに、避妊方法は男性主体の方法を選択するという事は、コンドームという最も一般的な避妊方法がたまたま男性主体のものであるために、「避妊は男性がするもの」という考えを持っていることが推測される。

避妊行動で自分に不足しているものでは、男女とも「わからない」が最も多く、避妊方法については「もっと知りたい」と考えていることから、知識を得たいという欲求はあるが、自分自身の性行動を漠然とした形で捉えている姿が伺われる。避妊の実行率が低く、避妊の方法は避妊効果が高く男性主体のものを望み、避妊行動で自分に不足しているものは「わからない」と答えた者では、望まない妊娠をしてしまう可能性が高くなる事が容易に予測される。

山本氏は、「避妊行動は、避妊によって現在の妊娠しない状態を保ち、心身共に良好な状態を保とうとする保健行動の一つと考えることができる」

³⁾と述べているように、保健行動は、動機が負担より大きければ行われるが、動機がなければ負担が小さくとも保健行動は行われにくい。これを避妊行動に当てはめてみると、妊娠したくないという気持ちや妊娠を避けることによって今の状態を保ちたいという気持ち、妊娠という自分にとって困難な状況を避けようとする強い気持ち等の動機を強めていき、パートナーとの関係性に基づく負担感や女性自身の身体的・精神的負担感を少なくしていくことで、避妊行動は実行されやすくなるものと考えられる。

2. 低用量ピルについて

低用量ピルについて、「知っている」は男女とも約40%であり、性交無の学生より性交有の学生に多い。また、ピルの使用賛成の学生のうち女子では72.2%、男子では63.5%が性交有の人である。これらのことから性交経験有の学生の方がピルへの関心が高いことがわかる。しかし、ピルのことを、「あまり知らない」、「知らない」学生やピルの使用の賛否に対して、「わからない」が性交経験の有無に関わらず半数以上いるということはピルの周知度はあまり高いとは言えない。

ピルの使用の賛成理由として、「避妊効果が高い」、「女性が主体的に避妊できる」が多いことから、ピルの使用賛成者はピルの主な特徴を認知していると考えられる。逆に月経周期が安定したり、月経痛が軽減するなどの副作用に関する事を理由にあげたものは少なかった。

ピルの使用に反対の理由で、「副作用」が最も多いのは、これまでも報告されているとおりである。「性のモラルが乱れる」をあげた男女約25%の学生は、妊娠を心配しないで性交を楽しむことが性のモラルの乱れにつながるのではという

懸念を抱いており、従って、妊娠の可能性が性行動のブレーキにつながっていると言えよう。

ピルに関する情報を得たいかについては、「得たい」という学生は男子より女子の方が、また、性交無の学生より性交有の学生に多く、女性主体の避妊法であるピルは性交有の女子に関心が高いことがわかる。また、得たい情報が、「副作用」、「避妊効果」、「副効用」と「薬そのものの特徴」を知りたいと考えている者が多いこともわかった。情報収集をする手段としては「雑誌」が多いのは、学生にとって入手し安く身近な情報源といえる。雑誌は、全国調査においても「性に関わる行動や意識に影響を与えたもの」が「友人」の次に、「雑誌・新聞・漫画・コミックス」である。インターネットによる情報入手を希望する者が多いのは、インターネットの普及率に比例しているものと思われるが、このことは雑誌同様にプライバシーに関わる性的情報を個人的に入手できるという利点があるためと考えられる。

わが国では1996年6月に低用量ピルが認可され、国連加盟国中、最後の認可国であることを考えると、わが国独特の性に対する考え方が根強くあったことが伺われる。すなわち、1949年から学校において実施された「純潔教育」には、性否定の禁欲思想や女性だけに貞節を求める二重規範のような古い性観念があり、その風潮が現在も残存していることは否めない。1965年頃に欧米から流入した性解放や女性解放の思想が広く浸透し、純潔教育への批判や反発が強くなり、「セクシュアリティ」を肯定的に捉えた「性教育」が推進されるようになってきているところである。性を肯定的にとらえるということは、性交を奨励することではなく、性が人間にとって必要なもの、大切なものであるというメッセージを前面に打ち出した立場である。しかし、性教育は家庭でも学校でも不十分かつ不完全にしか行われておらず、性に関する知識は主として友人やマスメディアから得られていて正しい知識に乏しいと思われる。また、多くの中学生・高校生がアダルトビデオをみており、人間的背景から全く遊離した、演技された性行動の刺激的な描写や、女性の人権を無視した相手を恥辱あるいは残虐性を持って扱うような描写から性行動の知識を得ている。アダルトビデオだけではなく性産業が盛んな日本においては、あまりに早い時期から商業的な性の情報に触れる機会が多い。こういった中で、性を肯定的に捉え、性行動

に対する責任ある態度を養っていくことが急務であると考えられる。若者には、性行為をする意味や性行為によってもたらされるリスクとその予防法を明確に伝え、性行為するかしないかを自己決定でき、自分や相手を尊重し大切にすることを責任ある行動がとれるように支援していく必要がある。また、鈴木氏は、女性が避妊できるための能力について直接的な能力としては、「避妊法の知識が得られる」、「避妊法が入手できる」、「避妊の交渉ができる社会的スキル」、「避妊法が正しく実行できる」をあげており、間接的な能力としては、「自己実現を目指していること」、「家族計画の理念がある」、「パートナーとの対等な関係が築ける」、「避妊法の相談ができる」をあげているが、避妊するため能力を養っていく上で、若者が受ける教育や指導、若者が入手する社会的情報などは、「性」を肯定的に捉えたものである必要がある。また、避妊行動は相手があつての保健行動であるので、対人関係的視点を盛り込んだ情報提供をしていくことや、性愛行動の形成を目指した支援が必要である。

まとめと展望

今回の調査結果から、大学生の避妊の実行率は全国レベルより低く、避妊方法は「コンドーム」や「陰外射精」が多く女性が主体的に行える方法ではなかった。避妊方法を選ぶ基準では、男女とも「避妊効果」が最も多く、次いで「男性主体」があげられた。避妊方法を知りたい学生は、性交経験のある学生に多いが、自分の避妊行動で「不足しているもの」が「わからない」学生が多かった。また、低用量ピルは約40%の学生が知っており、使用賛成者は約25%で性交経験のある学生に多い。使用賛成理由では「避妊効果が高い」が最も多く、反対理由では「副作用」がもっとも多かった。低用量ピルに関する情報が「得たい」学生は性交経験のある女子に多く、入手手段としては「雑誌」「インターネット」が多かった。以上のことから若者への性の教育・支援においては、性を肯定的に捉えた立場で、「性交」の意味について語り、性交によってもたらされるリスクとその予防法に関する明確な情報提供をする機会を増やすこと、そして、その情報には対人関係的視点を盛り込んだ性愛行動につながる情報が必要であるという示唆を得た。従って、今後、若者とともに性行動への対応のあり方について討議を深め、彼らの性意識の方向付けについて模索していきたい。

最後に、今回の調査にご協力いただいた大学生の諸氏に心より感謝する。

引用文献

- 1) 青少年の性行動－我が国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告－，財団法人日本性教育協会編，pp42，財団法人性教育協会発行，2000.
- 2) 若者の性－白書－，財団法人日本性教育協会編，pp95，小学館，2001.
- 3) 吉沢豊予子，鈴木幸子編著：女性の看護学，pp87，メヂカルフレンド社，2001.
- 4) 3) に同じ，pp91